

Title	老いと死にまつわる2つの思案
Author(s)	佐藤, 眞一
Citation	生老病死の行動科学. 2009, 14, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/12824">https://hdl.handle.net/11094/12824</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 老いと死にまつわる2つの思案

佐藤 眞一

藤田綾子教授のご退職の後を引き継ぎ、2009年10月1日付で大阪大学大学院人間科学研究科臨床死生学・老年行動学分野に着任いたしました。これまでに積み重ねられた本誌の伝統と業績に恥じない編集を心がけていく所存でございますので、皆様には、何卒、ご支援を賜るようお願いする次第です。

また、本号よりweb上でも本誌の各論文をご覧いただけるようになりました。より多くの方々に本誌に掲載された論文をお読みいただき、ご指導、ご意見を賜ることができれば幸いです。同時に、本誌が、従来以上に老年学および死生学に関する研究に貢献できることを願っております。

ところで、老いと死について、最近、私は2つの考えに囚われています。

1つ目は、「健康長寿」についてです。健康長寿は誰しもが望むことです。介護予防が介護保険に取り入れられ、アンチエイジングを標榜するさまざまな商品や医療が派手に喧伝されているのもその現れでしょう。しかし、もしも誰もが健康長寿を実現できることになったら、どういうことが起きるのでしょうか？ 私が心配しているのは、「健康長寿は高齢者を孤独にする」ということです。一昨年、私の父が軽い脳梗塞で入院しました。幸いにも後遺症はほとんどなかったのですが、やはり心配なため、頻繁に実家に電話を掛けたり、様子を見に行くようになったりしました。それまでは盆と正月程度しか実家に帰ることのなかった息子に会えるということで、父に輪を掛けて母が喜んでくれています。父も母も健康長寿でいつづけたとしたら、私はたぶん今まで通り盆と正月だけの息子だったでしょう。父が倒れたからこそ、行き来が頻繁になったのです。まさにパラドックスですが、病気が孤独を阻む、を地で行く例を体験しました。それ以来、私は、高齢者は身体が弱くなり、それを家族や友人が心配することで、その高齢者の人間関係が活発になる。健康長寿は、必ずしも良いことばかりではないのではないか、という思いに囚われるようになりました。これも「高齢者としての生活、高齢者文化」の本質を示す一側面なのかもしれないという思いです。人生の終末期は他者との関係が重要な鍵になります。上手に他者に頼ることができるだけの人格の高みに登ることができるのは、高齢者だからこそと思います。しかし、一方で、多くの高齢者が孤独なうちに死を迎えていることも事実です。家族や友人に囲まれた中での終末期と、孤独な終末期にはどのような背景の違いがあるのかを、改めて考え直してみたいと思っています。

私の2つ目の囚われは、「はたして『高齢者は』存在するのか」という考えです。私はこれまで長きにわたって、数多くの高齢者を対象に研究をしてきました。しかし、今から10年

以上前に行った「主観年齢」の研究を見直してみると、実年齢が60代や70代の方たちの主観年齢は、せいぜい40代後半から60代前半なのです。80代になるとようやく少し実年齢に近づく傾向がありました。79歳になる私の父も、脳梗塞になるまでは壮年のようでした。入院中に見舞いに行くと、その父がいきなり私に向かって、「俺はもうダメだ！」と言うのです。すでに死を見つめているのだと感じました。それ以来、私は、もしかしたら多くの人々にとって中年期後期の次には終末期があるのであって、主観的には老年期というものは存在しないのかもしれない、という思いに囚われるようになってしまいました。私が、実年齢だけから高齢者と決めつけて実験や調査をしてきたデータは、いったい何だったのだろうかということも考えました。高齢期に慢性疾患や障害を抱えることで徐々に自らの老年を意識するようになるのかもしれませんが。先の、「健康長寿は高齢者を孤独にする」と「はたして『高齢者』は存在するのか」という2つの命題は、これからの私の研究の重要な背景となりそうです。